

崑崙異聞

雷雨



こんろんいぶん
崑崙異聞
試し読み版

雷羽 著
Ground Top 小説

「崑崙異聞-こんろんいぶん-」

楽曲始、「披着羊皮的狼（羊の皮を被った狼）」刀郎

楽曲終、「BE ALIVE」小柳ゆき

登場人物

天曝（てんぱく）

盾兩（こりょう）

白鶴童子（はっかくどうじ）

冀源真君（きげんしんくん）

東嶽玄尊（とうがくげんそん）

道化真君（どうかしんくん）

空燕真人（くうえんしんじん）

本ファイルはサンプルです。

「崑崙異聞」の始め二ページを試し読みできます。

以降は本編でお楽しみ下さい。

サンプルとして、一部内容が異なります。

一 序

太平たる大国、秦。まだ羌族や匈奴が勢力を持ち、秦が攻防に講じていたころ。その国の間を自由に飛び越えられるのは仙くらいのものであった。

転げるように走り続ける男。そしてそれを怒鳴りながら追う民衆。彼らの手には鋤や鍬、石や包丁を持っている。息を荒げながら、時に切りながら、男は走ひたすら走った。

少し前まで民は飢えていた。周は栄え民にも認められる国だったが春秋になるにつれ戦が始まるとさらに王の支援は行き届かず、山淵の民は貧困に喘いでいる。おまけに封神のことがあって妖仙はもはや敵でしかない。

汗も絶え絶え、地に石を転がすように、だがここで人間以外のものになろうものなら、今度は何が飛んで来るかわからない。しかしそんな余裕を言っている場合ではなく、目の前には崖が見え始めた。足を外へ向ける余裕などない。男はあっという間に崖の前で立ち止まった。

「お前ら、気を抜くなよ。何に変化するかわかんないからよ。」

先頭を切る体格のいい村人が大声を張り上げれば、周りの者たちから賛声。

「おい妖怪、お前みたいな目が黄色い奴はすぐにバレんだよ。」

「何もせぬ・・・そう言ったじゃろう。」

「信用できないねえ、お前みたいな妖怪は五万と見てきたさ。最初は調子の良い事いって、後から本性を表す。もう騙されねえ。」

怒声の中で、村人は礫を投げつける。それが男の脇腹に当たって弾き飛ばされた。うっすらと痣ができるほどの痛みに、男が思わず手で押さえる。

汗で張り付いたぼろぼろの白い衣。村人よりも質素かもしれない服装からは仙人のような気はまるで感じられない。手入れもされていない髪は砂埃で白っぽくなっていて。人間で言えば四十前後の成りで、筋骨のある体格、短くも長くもない全髭。ただ一つ違うのは眼の色が黄色いことだけだ。

将に村人が襲いかからんとするとき、その後ろから五、六脚の馬の蹄音が響いた。その音に村人が振り向くとなにやらざわめき出す。男からはその理由が見えない。

「お前たち、ここで何をしている。」

「はい厩兩將軍、妖仙が来ておりましたので迫切しているところでございます。」

「妖仙だと。」

村人を馬で退かせながら民衆の中を進むと、男を見下げる強い目。目に汗が沁みて上手く視界を捉えられない。骨ばった顔立ちに、鬚を湛えた凜妙な顔立ち。甲冑はわずかに軽装だが、將軍と呼ばれるだけある立派な作り。栗毛の馬にその武人らしい体格が似合う。

「お前か、その、妖仙とやらは。」

部下が数人、男を取り囲む。手足を掴まれ、咄嗟に暴れるが素早く縄で押さえられて身動きができない。

「連れてこい。お前たちはもう戻れ、これは俺が始末しておく。」

「しかし厩兩將軍、妖仙は侮れませぬ。」

「何を言う。我らが武人に妖仙が役不足ならざれば、お前たちに何が出来る。石礫を放って兎が死ぬようなものではない。おとなしく村に帰れよ。」

厩兩の言うなり一理あると、村人たちがぞろぞろと村に帰りはじめる。

男の視界は麻布で覆われて見えなくなった。全身が一つの塊のようにされ、馬にどっさり乱暴に積まれた。疼に痛む脇腹はそれから幾刻も消えなかった。そしてまたもや乱暴に下ろされ、担がれたと思えば、牢の中。がちゃんと響く重苦しい音と食い込む縄。少し薄暗くて黴臭い牢を見渡すと、窓が一つ、藁が少し、冷たい石床、腐食して茶色がかった鉄格子。格子の向こうには水貯めがある。

声は出なかった。布で口が塞がれているが、足は幸い自由のようだ。

「妖仙。」

ざっと足音を止めたのは厩兩。太く、芯の通った声が牢にこだまする。

「何故お前はあの村に来たのか、そんなことはどうでもよい。」

男は目を細めた。首を傾げると厩兩が再び口を開く。

「お前、名は何という。」

「・・・」

「おっと、そうだな。」

牢番に鍵を開けさせると、厩兩自ら牢に立ち入り、男の口枷を外した。吹っ切れたように呼吸を繰り返す男。

「名は。」

「天曝、じゃ。」

「そうか、天曝。お前にも名はあるのだな。」

厩兩が笑う。天曝の顎を持って顔を確かめるように左右へ振る。「縄を解け」と牢番に告げるなり、牢番は驚き反論する。厩兩が再度「解け」と声を荒げれば牢番は急ぐように天曝の縄を解いた。自由になった両手を眺める天曝、その腕を掴み上げる厩兩。

「村人のいう妖仙とやらならば連行中に暴れて縄を解き、我が部下を惨殺して逃げることだろう。だが、俺が見る限り、お前は抗いもせず、動きもしなかったのは何故だ。お前の目を見れば妖仙とわかる、だがお前は普通の妖仙とは違う。何故だ。」

「妖仙が皆、そうではない。村人の言うように乱暴な残酷な妖仙もおる。少なくとも私は人を殺すことは好まぬし、人に手を出してはならぬという仙界の掟は守っておる。このような扱ひも初めてじゃ。」

「そうか。面白い。」

「厩兩、と言ったかのう。おぬしが村人に言ったこと、それは私を殺すということじゃろうな。」

射光に光る黄色い目が、厩兩を見据える。少し憂いを帯びて。それを見下げるように厩兩。

「誰が殺すと言った。俺は言ったことはするが、言わないことはしない。お前を殺すと言っていなければその限りは無し。」

「ならばずっと牢に閉じ込めておくつもりか。」

溜息を吐くなり厩兩は天曝ごと引っ張り、牢から連れ出す。右へ左へ、気がつけば黴臭い牢とは真逆の装飾がかった部屋に立っていた。

「そこに寝ろ。」

そう言って寝台を指差す厩兩。

「一体何じゃ。」

荒い足取りで天曝に歩み寄ると、首もとを掴んで寝台に押し倒した。脇腹に痛みが走り、思わず声か拳がる。

「おとなしく寝ていれば痛い思いもしなかったのだがな。」

「怪我を、知っておったのか。」

柵から壺と布切れを取り出すと、それを小机の上に並べる。寝台の端に腰を降ろし、壺を匙でかき混ぜる。

「仙は治りが遅いと聞くがまことか。」

「そうじゃな、人間や獣の倍かそれ以上はかかるのう。小さな掠り傷でも二月はかかるかもしれぬ。」

「見る限りそういうものだな。」

黒い粘り気のあるものを壺から引っ張り出すと、それを小皿に移した。

「何じゃそれは。」

「以前に高位だという仙老から賜った薬。傷の治りを早めるとか言っていたな。仙に効くかわからんが、仙がくれたものだ、効くだろう。」

厩兩が天曝の襟元を開く。脇腹には血が滲んで、痣のように青ずんでいた。そこに黒い薬を塗るとそれに布を当て、包帯を巻きつける。

「これで様子を見る。」

「妖仙にここまでする理由はなんじゃ。私がおぬしを殺すかどうかもわかぬというに。」

「お前も私がお前を殺すかはわからないだろう。」

崑崙異聞 (サンプル)

著 者 雷羽
イラスト 雷羽
発 行 二〇一一年三月
管理コード df-419841wbvp_s
著 作 権 Ground Top by LeiYu
定 価 試供品

個人販売元

Ground Top <http://groundtop.sakura.ne.jp/>

雷 羽 banji.jp@gmail.com

Printed in Tokyo, Japan.

All Right Reserved.